

答え合わせ・解説

問1	答え 1 衣類	東京港や大阪港は、背後に巨大な人口を抱える大都市圏（消費地）が存在します。そのため、工場ですられる原材料よりも、私たちの生活に直結する衣類や食品、日用品などの「製品」の輸入が多くなるのが特徴です。一方、鉄鉱石や原油、液化天然ガスなどは、主に製鉄所や石油化学コンビナートがある工業港で多く扱われます。
問2	答え 1 地下のマグマの熱で温められた蒸気や熱水を取り出してタービンを回す。	地熱発電は、火山地帯の地下深くにある「地熱貯留層」から蒸気や熱水を取り出す方式です。これに対し、化石燃料を燃やすのは火力発電、水の高低差を利用するのは水力発電、ウランを利用するのは原子力発電です。岩手山のような火山の分布は、地熱発電所の立地場所と密接に関係しています。
問3	答え 1 それぞれの作物の生育に適した気温や降水量などの自然条件に合わせて、適地適作が行われているため。	日本の農業は、その土地の気候や地形などの自然条件を活かした「適地適作」が行われています。例えば、冷涼な気候を好むりんごは青森県や長野県、温暖な気候を好むみかんは和歌山県や愛媛県、そして広大な平野と水に恵まれた新潟県や北海道では米といったように、地域の特性に応じた産地形成がなされています。宮崎県できゅうりの収穫量が多いのは、冬の温暖な気候を活かした促成栽培が行われているためです。
問4	答え 1 地価の上昇によって都心部から郊外へ住宅地が移転し、夜間人口が減少する一方で、中枢管理機能が集積して昼間人口が増加したため。	東京の都心部（千代田区、中央区、港区など）では、高度経済成長期以降、地価の高騰によって住民が郊外へ流出する「ドーナツ化現象」が起きました。一方で、企業の事務部門や官公庁などの「中枢管理機能」が集中したため、昼間人口は非常に多くなりました。この結果、夜間人口が少ない一方で昼間人口が極めて多いという極端な昼夜間人口比率が生じます。
問5	答え 2 特定の国や地域に産出が偏っているため、産出国の政治情勢や輸出政策の変化によって、供給不足や価格高騰が起こりやすい。	レアメタルは中国や南アフリカ、ロシアなど、産出国が特定の地域に偏っている（偏在性が高い）ことが多い資源です。そのため、産出国が自国の利益や外交を優先して輸出を制限したり、現地の情勢が不安定になったりすることで、世界の供給が左右されるリスクを抱えています。日本のような輸入依存度の高い国では、供給源の多角化や備蓄、代替素材の開発、リサイクル（都市鉱山の活用）が重要な課題となっています。
問6	答え 1 国内の漁獲量が減少した一方で、消費量を維持するために海外からの輸入量が増加したことで、自給率が低下した。	日本の魚介類消費量は食生活の変化により近年は微減傾向にありますが、大きな変動はありません。一方で、排他的経済水域（200海里水域）の設定による遠洋漁業の衰退や、漁業従事者の高齢化・後継者不足などによって国内の漁獲量は大幅に減少しました。この国内生産の不足分を海外からの輸入によって補うことで現在の消費水準が維持されているため、統計上、自給率が大きく低下する結果となっています。
問7	答え 1 かつては日本最大の工業出荷額を誇り、現在は中京工業地帯に次ぐ規模ながら、依然として主要な工業地帯の一つである。	京浜工業地帯は、日本の政治・経済の中心である東京と、貿易港を持つ横浜（神奈川県）を結び形で発展しました。戦前から高度経済成長期にかけては日本最大の工業出荷額を誇る地域でしたが、現在は自動車工業が極めて盛んな中京工業地帯に次ぐ規模となっています。しかし、巨大な消費地に近い利点を活かした出版・印刷業や食料品工業、さらには先端技術産業が集積しており、依然として日本の工業において重要な地位を占めています。「出荷額が最も低い」という記述は、歴史的背景や現状と照らし合わせると誤りです。
問8	答え 1 原油	日本はエネルギー資源の多くを海外に依存しており、特にこの品目は西アジア地域への依存度が極めて高いことが特徴です。2018年の統計では、サウジアラビアやアラブ首長国連邦、カタール、クウェートといった西アジアの上位4か国だけで、輸入全体の約8割を占めています。